

昭和56年（1981）九州地域の気象

（気象概況）

（1）おだやかな元旦を吹き飛ばす大寒気

移動性高気圧が、年末・年始にかけて日本の南部を通過し、12月27日以来の寒波も元旦には全くおさまった。そして、九州各地は来る年の安穏を願うかのような暖い穏やかな元旦に明けくれた。これも一時的で、2日以降は大陸高気圧の張出しが強まり、西日本一帯は8日までかなり強い寒波の影響下にさらされた。その後も3～4日間隔で寒気団の南下が続き、日本海岸一帯は1963年以来の豪雪に見舞われた。

九州地方は、大陸から南下する寒気団の影響を受けて、冷い晴天の日が多く、1月の月平均気温は平年より約2℃低かった。降水量は平年の60%以下で、かなり乾燥した1月であった。2月に入ると、上・中旬は寒気も弱まり春らしい日が現われ、9日には佐賀・福岡など九州西部で本年初めての黄砂が観測された。下旬になると冬型気圧配置が急激に強まり、25～27日にかけて日本全体が近來にない強い寒気団に覆われた。気象庁の測定によると、輪島上空(5,500m)で-45.1℃となり、「大雪注意報」が出された。日本各地で最低気温更新がなされた。九州地区も異常な低温に襲われ、宮崎のカンキツ栽培地では-8℃以下という低温が発生し（2月27日）、カンキツに大被害を与えた。樹体損傷の生じた園面積は1,622ha(28%)となり、被害は約80億円に達すると報告されている。東支那海に面する茂木地方のピロ園も、この間の寒波によって壊滅的な打撃を受けた。

（2）足ぶみしながらも春順調

3月になると天気移りかわりは早くなり、移動性の高気圧と低気圧とがたぎつぎと西から東へと流れ、それに伴って高低を反復しながら気温は次第に上昇してきた。3月7日には九州地方では春一番が吹き、西日本一帯で黄砂が観測された。下旬になると、移動性高気圧に覆われた地方では一気に気温が上昇し、4月下旬の陽気となった。しかし、下旬後半には、前線が南岸に停滞し、菜種梅雨のようになり、九州とくに南九州では降水量は平年の140%以上と陰曇な天気が続いた。菜種梅雨の傾向は4月に入っても続き、春の進みはやや鈍くなった。下旬になると、1時的に南高型の気圧配置となり、いたる所で記録的な4月の最高気温が現われた。南西諸島では平年比の150%に近い降水があったが、九州では80～110%で、ほぼ平年並であった。気温も4月平均はほぼ平年並であった。

（3）天気の変化早く、南西諸島梅雨入り

初夏とは名ばかりで、気温の高低、晴・雨天と天気の

回転の早い季節であった。1日はメーデーを祝うかのように、移動性高気圧が九州・中国地方を覆い晴天であった。この傾向は3日まで続き、6月上旬なみの陽気が多くので観測された。しかし、4日寒冷前線が南へ抜けたあとは、寒気の張出しがあり、一気に温度は平年以下へと降下した。この前線通過のあと九州一帯で黄砂が広く観測され、いよいよ春から初夏へと季節は進んできた。張出してきた移動性高気圧のために、5月5日には静穏で晴れた夜となり宮崎内陸部では晩霜被害が発生した。

南西諸島付近には前線が停滞し、6日に梅雨入りが宣言され、20～100mmの降水があり、これらの地域は本格的な夏へと歩み始めた。これは平年より約5日早かったが、沖縄の昨年の梅雨入りより16日も遅かった。10日から12日にかけては九州北部に前線がかかり、この上を低気圧が発達しながら東進した。このため、暖湿流が南から吹きこみ、九州一帯に大雨・洪水注意報が出た。11日の降水は、人吉で140、都城で77、長崎で60mmを記録した。寒の戻りと陽気の訪れとの交代が目まぐるしく続きながらも天気は進み、5月下旬(30日)には九州南部は梅雨に入った。月初めに梅雨入りを宣言された南西諸島では、意外に前線の活動が鈍く経過し、小雨状態が続いた。このため、平年比降水量は60～80%で、やや干天気味であった。日照率はかなりよく、平年比で110%以上であった。

6月になっても、梅雨前線は本州南方の海上を東西に走っており、例年になく活動は鈍かった。台風4号の接近（6月13、14日）で、前線は活発になり、九州南部に40～50mmの降雨があった。また、6月10日には北九州一帯も梅雨入りとなった。しかし、梅雨前線の力は南西諸島の方から弱まり、17日には沖縄地方は梅雨明けとなった。しかし、九州北部では台風5号の接近を契機として、前線の活動が盛んとなってきた。台風5号は台湾から東支那海をへて長崎県北部に上陸し（6月22日）、九州山脈の東側に100～150mmを越す大雨をもたらした。このあと前線は九州を横断したままで、25～30日にかけては梅雨末期型の豪雨が西日本一帯を襲った。この前線帯活動に伴って、6月29日は福岡県南部、佐賀県南部、及び熊本県北部地区では強風と竜巻が発生し、家屋や農作物などに被害が発生した。大雨は断続的に九州北半分を襲い、30日は多くの地域で100～200mmの降水があり、特に島原では337、長崎では245mmと異常な量に達した。しかし、九州南部から南西諸島にかけては、依然として小雨傾向が続き、平年の60%以下と早懸傾向が続いた。

関東以北の北日本では1980年のような低温気味であったが、九州地区は平年より1℃程高く経過した。このため、九州各地の最高気温は6月7、8日には30℃を超え、真夏日を記録した。日照率は九州中部を境として、

北部では平年以下（70～100%）、南部では100%以上となった。これを反映して、6月の月間降水量は、九州北半分では100～140%、南半分では60～100%となった。

(4) 梅雨早明けで夏きたる

梅雨末期となり前線は次第に北上し始めたが、西から流れくる低気圧と高気圧の配置状況によっては、九州地域で前線の活動が激しくなり、7月7日には北九州地方には雷を交えた大雨（100～200mm）となった。しかし、中旬になると前線活動は急激に弱くなり、11日に九州南部、14日北九州地方の梅雨明けが発表された。この頃から冷たい大陸気団の流入が頻繁で、大気層は不安定になり、強い日射と相まって雷の発生が異常に多くなった。このため、落雷事故が多く発生した。23日24日にかけては寒気南下のため多くの地点で平年値以下へと気温は低下し、強い雷をともった降雨は50mm以上の雨をもたらした。27日には寒気と暖気とが九州地区で境を接し、暖湿気流の流入もあって強い雷雨が九州一帯に発生した。

28日に父島南東海域に発生した台風10号は30日には九州へ接近し、31日0155時に日南市付近に上陸したあと、九州を横断し同日0800時頃に長崎市を通過して海へ抜けた。この台風のため、宮崎市では45.3%の瞬間最大風速を記録した。また多くの地域で100～200mmの降雨があった。このような降水にもかかわらず、九州南部の月間降水量は平年の60%台で、干天傾向は続いた。気温はほぼ平年並みであった。

梅雨明けは平年より早かったが、太平洋高気圧の発達には余り強くなく、大陸から低温で乾燥した気団が周期的に南下してきた。このため、8月には割合にさっぱりした晴天が続いた。しかし、寒気南下時には前線帯が九州全域を通過し弱いながらも降雨をもたらした。しかし、南西諸島は西へ張出してきた太平洋高気圧に覆われ、豪雨に泣かされた関東以北、とくに東北地方・北海道地方と反対に小雨・早魃傾向に8月もあった。この余波は鹿児島・宮崎の両県にも及んでおり、畑作物は若干早魃の影響を受けた。気温はほぼ平年並みであったが、時折り猛暑に襲われた（8月1～3、18～22、30～31日）。しかし、大陸からの寒気の流れは早々と立秋の気配を人々に感じさせた（8月7～8日）。

(5) 夏浅く、秋の歩み早し

東支那海を北上していた台風18号は、上海付近で急に東へ方向をかえた（9月2日）。このため、九州一帯では20～30mmの降雨があった。朝鮮海峡を通る台風へ南方から暖湿気流が流入し（9月3日）、九州および沖縄地方では50～100mmを越す降雨が記録された。この台風は前線を伴って北海道を直撃し、かなり大きな被害を与えた。このあと、日本全体が大陸からの寒気団内に入り、一気に秋冷へとかわった。しかし時折り帯状高気圧が発生し（17～23日）、日中は陽気もどってきた。これを打消すように、台風20号の名残りの温低が華中から発達しながら日

本へと移動し（9月24日）、25日には九州全域に大雨をもたらした。特に北西部では局地的豪雨となり、長崎市では102mmの時間雨量を観測し、過去の記録を更新した。

10月になると、4～5日間隔で気圧の谷が通過するようになり、天気はかなり規則正しく変化しながら、次第に秋を深めていった。このため気温の変動もかなり大きかったが、昨年のような長雨はなく、日照時間はほぼ平年並みであった。また、気温もほぼ平年なみに経過した。このため、昨年とちがって、10月の天気はイネの発熟にかなり好適で、高い作況指数をもたらす一つの原因と考えられる。

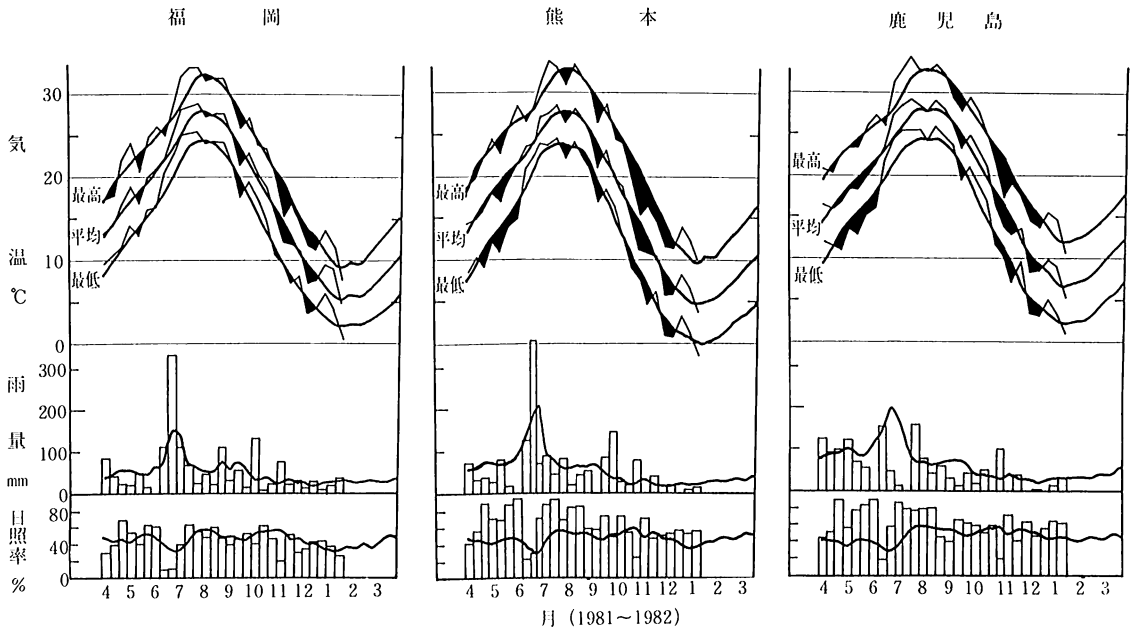
10月20～22日にかけて日本を襲った台風24号は秋の雨台風の名にたがわず、春以来干天に悩まされていた沖縄地方に待望の雨をもたらしたが、関東地方には記録的大雨と洪水による災害をもたらした。この秋台風の通過後、気圧配置は一気に西高東低の冬型となり、阿蘇山に初雪があった（10月23日）。この気圧配置はほぼ26日まで続き、一気に秋は深まった。

(6) 足早な冬

11月は全国的に低温傾向となり、関東以北で2～3℃、それ以南で1～2℃平年より低くなった。冬型気圧配置の強まった11月10日には熊本で初氷が、12日は福岡で初霜が観測され、冬の訪れの早さが身にしみた。前線および低気圧の移動は割合に頻繁で、その都度冷雨が九州地方に降った。このため、九州本島の11月の月間降水量は平年比の110～140%に達した。晚い台風26号は、早天の続く南西諸島に50mmほどの雨をもたらしたが、月間降水量は平年の60～110%と十分な量には達しなかった。

12月1日から4日にかけては、第1級の寒気が南下して西日本を覆い、さらに東にのびて冷たい帯状高気圧となった。この寒気のため、12月2日に鹿児島、枕崎で初雪が記録され、平年より30日余りも早かった。季節風に直面する福岡では12月1日に初雪が観測されたし平年より13日早かった。この冬型も中旬になると次第にゆるみ陽気は平年なみとなった。21日から28日にかけては帯状高気圧が日本全体を覆い、温暖で晴れた穏かな天気が続く年末となった。

（九州農業試験場環境第一部農業気象研究室）



第1図 九州の北部、中部、南部における気象状態（旬平均値）の年変化。
太線は平年値（1951~1980）を示す。